

国家社会主義と精神科学

—T. リットの見解を中心に—

小川 哲哉

(1994年9月17日受理)

1. はじめに

ドイツ教育学界においては、ここ10年来「国家社会主義（ナチズム）と精神科学的教育学」との関係を問いただすことが、主要な論究テーマの一つになっている。

とりわけ、戦後のドイツ教育学界において再度先導的役割を担っていった精神科学的教育学派の代表者たち（E. シュプランガー、H. ノール、T. リット、E. ヴェーニガー、W. フリットナー）が、ナチズムとどのような関わりを持っていたのか、という問題に対しては反省的意味を含めた議論がなされていると言う⁽¹⁾。

ここで反省的という言葉が使われる理由は、第一に彼ら自身がナチズムとの関わりを、公の立場において根本的に、あるいは自己批判的に明確にする努力を忘れていたのではなかったか、ということ、さらには彼らの学問上の後継者たちも先達者たちがナチズムに対して取った態度と根本的に対決することを怠ってきたのではなかったか、ということにある。いずれにしても、「ナチズムと精神科学的教育学」との関係を根本的に問いただすという試みはドイツ教育学界において近年まで真剣に行われていなかったのである。このことに対する学問的な反省が、上述のような論議をもたらしていると言えるであろう。

本論文では、以上の諸点を考慮に入れ、精神科学的教育学派の代表的人物の一人であるテオドール・リット（1880～1962年）に焦点を当て、上述の問題に関する若干の考察を行いたい⁽²⁾。以下、先ず最初にナチ体制下の大学の状況と精神科学的教育学派への影響、次にナチズムに対するリットの対応と、彼のナチズム批判の内実の一端を明らかにする。

2. 精神科学的教育派を取り巻く諸状況

(1) ナチ体制下の大学

ヒトラーが政権を獲得し、彼の政治的基盤が確立する1933年以降、諸大学は、二つの側面から強制を受けることになる。

ナチ党は、1933年春には諸大学の学長、学部長、評議員を交代させ、党の方針に合わない教授を追放する。こうした政策を実現させる根拠になったのが全権委任法成立後、時を経ずして出された「公務員制度再建法」（1933年4月7日）である⁽³⁾。同法は、現行法を超越して以下のような公務員を免職させることができた。

①ワイマール共和国下で任用された公務員及びナチ党と敵対する党に関わりを持っていた公務員

②非アーリア人（主にユダヤ人を対象）

③民族国家への忠誠の証明を絶えず示さなかった公務員

この法律により、1933年から1934年の間に、1,684名の教授、私講師、助手さらには図書館員、美術館員が罷免されたのである。その中には M. ホルクハイマーや K. マンハイム、さらには自由法運動の H. カントロヴィッチ、キリスト教社会主義者の P. ティリヒなどの著名な学者がふくまれていた。このことは、ナチ党の基本政策である反ボルシェヴィズムと反セミティズムが大学の中にも公然と侵入し始めたことを意味する。

さらにこうしたナチ党の大学政策に呼応した学生運動によっても大学はナチズムに呑み込まれていった⁽⁴⁾。学生たちの最大の包括組織「ドイツ学生連盟」はすでに1931年以降、ナチ学生連盟（1926年創設、略称：NSDStB）によって主導権を完全に奪われていた。彼らは、講義のボイコット、示威的なナチの制服の着用、教室での公然たる攻撃と政治的信条告白等の過激な行動を行っていたが、1933年4月にはベルリン大学学長に「非ドイツ的精神」の撲滅を要求し、その結果、実力行使の威嚇によってついにはユダヤ人教授を罷免するに至るのである。

(2) 精神科学的教育学派への影響

このような状況の下で、精神科学的教育学派に属する研究者たちは、少なくとも1933年の春の時点まで、ベルリン大学のシュプランガーの辞職（同年4月）以外、大きな影響を受けなかったことが確認されている⁽⁵⁾。それは、彼らがこの時期のナチズムに対して明確な対決姿勢を見せなかったことが理由の一つとしてあげられるが、より本質的には精神科学的教育学派の多くの研究者に見られる彼ら特有の「文化理論」的論究スタイルにあったのではないかとされている⁽⁶⁾。すなわち、それは教育の場としての種々の「文化領域」の内面的原理やその機能を、その社会・経済基盤から独立させて論究するあまり、教育への具体的な権力関係の影響を的確に把握することができなかった、ということである。例えば、フリットナーや、あるいは辞職させられたシュプランガーにおいてさえ、雑誌『教育』の掲載論文においては⁽⁷⁾、後に彼らがナチ支配に対して批判的な態度を取った事実を疑うほど、ナチの教育政策への親和的とも受け取れる思想的態度を持っていたと言われている⁽⁸⁾。すなわち、彼らはナチ政権成立の時点ではその教育政策に対して政治的・教育的に極めて曖昧かつ多義的な、矛盾に満ちた対応を取っていたのである。それは、彼らの多くが、少なくともこの時点までナチズムの本質を見抜いていなかった、あるいは見抜けなかったことの証左にもなるであろう。

(3) リットの対応

精神科学的教育学派の多くの学者が、このような対応に始終する中で、ただ T. リットだけは、刊行物においてナチズムの「人種理論」や「歴史観」を公的に批判し、長年にわたって培われてきた哲学的論究態度とその方法によって時局の政治問題と対決したことが指摘されている。

リットは1934年、雑誌『教育』において論文「国家社会主義国家における精神科学の位置」⁽⁹⁾を发表し、その中で教育及び学問探求の自由の意義を強調するとともに、ナチ的な「人種理論」の論理的不整合性を、哲学的探求姿勢に基づいて極めて冷静な態度で批判し

た。この論文は彼がミュンヘンで開催される教育学会で行なうはずであった同名の講演の草稿であったが、主催者側がナチ政権への配慮から学会プログラムよりはずした経緯をリットは、論文の序文において明らかにしている⁽¹⁰⁾。こうした彼の姿勢からも見てとれるように、彼のナチズムを批判する態度は当初から、他の精神科学的教育学派に属する研究者とは対照的に一貫していたのである。その後彼は、著作『哲学と時代精神 Philosophie und Zeitgeist』(1935年)においてその批判的立場の哲学的根拠づけを試み、さらには著作『ドイツ精神とキリスト教 Der deutsche Geist und das Christentum』(1938年)においてその試みを発展させ、さらに同名の講演を論文化した「人種理論の歴史把握の空想的基盤 Die gedanklichen Grundlagen der rassentheoretischen Geschichtsauffassung」(1938年)においてこれまでの主張をまとめている。

本論文では、主に『哲学と時代精神』及び『ドイツ精神とキリスト教』で展開されている彼のナチズム批判の内実の一端を明らかにしてみよう。

3. リットのナチズム批判

(1) ナチズムの哲学的根拠づけに対するリットの批判

1935年リットは、『哲学と時代精神』を出版するが、この著作もその骨子になったのは、前年の1934年11月10日、ベルリンで開催されたカント学会支部会での同名の講演であった。彼は、この講演においてナチズムの哲学的基礎付けの正当性に関する発表を行った。3日後の11月13日には、ナチ党報道部長 O. ディートリヒがケルン大学の新校舎落成式に際して、「ナチズムの哲学的基礎付け」という題目の講演を行っており⁽¹¹⁾、その意味でこの講演は、一リット自身も述べているように一ナチズムの正当性を学問レベルで考察した先取りの試みであったと言ってもよい⁽¹²⁾。

彼はこの著作の中で、哲学が「時代精神」(すなわちナチズム)の忠実な使徒にはなりえないこと、あくまで哲学的論究の範囲内で次のように指摘する。

リットはまず、「時代精神」の要請を正当化する根拠として利用されがちな哲学的定言を取り上げる⁽¹³⁾。「存在するところのものを概念において把握するのが、哲学の課題である。というのは、存在するところのものは理性だからだ……(中略)……哲学もまた、その時代を思想のうちにとらえたものである」は、『法の哲学』におけるヘーゲルの著名なテーゼである⁽¹⁴⁾。このテーゼは、「歴史的理性」を発見したヘーゲル哲学の不朽の功績の一つに数えられるが、それは以下のことを意味するものと言われている⁽¹⁵⁾。周知のごとく一般に「理性」とは、時空を越えて妥当する普遍的な真理をとらえる人間の精神的な能力のことである。しかしヘーゲルは、理性がそのような人間の主観的認識能力である前に、存在する現実であり、さらには歴史を貫いて生成・発展するもの(歴史的理性)であるとした。ここにヘーゲルにおいて哲学が、その時代を自覚する最高の表現としてとらえられることになる。

このようなテーゼに基づけば、哲学の役割を特定の時代の中に生起する「世界観」の存在基盤を問うことに置くこともできるであろう。ディルタイ的な意味によれば、「世界観」は、特定の生活の気分や生活態度の表出のことを指すものである。そして、それはさらに「典型的心的把握」や「典型的人間」の表出を意味するものでもある。リットは次のように

指摘する。「我々の時代には、民族や人種を世界観の根源基盤と見なす類型化と同様な形態を好む傾向がある。すなわち、それは〈北方的人間〉であり〈ドイツ的人間〉である……」⁽¹⁶⁾。

リットは、そのような世界観の根源基盤を根拠づける、あるいは考察する役割を哲学に求めることは、ヘーゲルのテーゼを誤って解釈した結果であるとする⁽¹⁷⁾。確かにヘーゲルの言うように、哲学は現存在するものにおいて理性的なものと非理性的なものを批判的に区別する役割を持ち、その意味で時代と結びつくものである。しかし、ヘーゲルは、現在を偶発的かつ一時的なものとしてとらえたのではなく、過去からの歴史的発展と、さらには将来に向けての生成をはらむものとしてとらえたのである。それ故にリットによれば、哲学の役割は、あくまでも特定の一時期中に生じたにすぎない世界観の存立基盤を解明するためにあるのではなく、力動的な歴史の展開過程の中に位置づけられる現存在を批判的に分析するためにあるという。このように、リットはナチズムの哲学的存立基盤の正当性について、ヘーゲルを援用しつつその基盤の空虚性を学問的立場から冷静に批判を試みている。

ところで、彼のこのようなナチズム批判は、当時どの様に受け取られたのであろうか？我々は、概して高度に専門的な哲学的論議は、世間一般の人々の話題にはならないと考えがちである。しかし、我々のこのような今日的判断を越えて彼の批判に対する反批判は大衆レベルでもなされていたことが指摘されているのである⁽¹⁸⁾。彼が講演を行った4日後の『フェルキッシャー・ベオバハター』紙には、「哲学と時代精神」という大きな見出しとともにリットの講演の記事が掲載されている⁽¹⁹⁾。『フェルキッシャー・ベオバハター』紙が、ナチ党の中央機関紙であったことはよく知られているが、ヒトラーが政権に就く1933年以降ドイツで最初の全国紙となっていた。1934年11月14日の5面には、リットの講演が、「ナチズムと新しい現実に対応する哲学についての話題」を提供するべきものになるはずであったのに、その期待を全く裏切る内容であったことが述べられている。また講演においてリットがその内容を十分に吟味することなく、「人種思想 der Rassengedanke をいかに攻撃し、破壊したか」は明かである、といったコメントや、さらには「励ましの拍手は、その講演がいかに強いユダヤ的なものを混入させた聴衆たちを満足させたかを教えてくれた」といった指摘までなされている。

こうした経緯の中で、リットはナチズム的思想の中核をなす「人種理論」との本格的論争を行う決意をする。

(2) ナチ的「人種理論」の内実とリットの批判

すでに指摘したように、ナチ的「人種理論」に対する論究は1934年の論文「国家社会主義における精神科学の位置」において行われているが、彼はその論究のさらなる展開を1938年に出版された『ドイツ精神とキリスト教』の中で行っている。

『ドイツ精神とキリスト教』において、ナチ的「人種理論」の代表的見解として取り上げられたのは、A. ローゼンベルクの『二十世紀の神話』(1930年)であった⁽²⁰⁾。

ここでは、リットの見解を分析する前に、このナチ的「人種理論」の系譜と、その中に位置づけられるローゼンベルクの著作の歴史的意味を確認しておく。H. グラーザー従って、ナチ的「人種理論」へ結びつく人種学の系譜をまとめておこう⁽²¹⁾。

〈1〉 ナチ的「人種理論」の系譜

19世紀中葉以降ダーウィンの学説を人間社会に適用させ、経済的弱者を抑圧する非人道的な立場を正当化しようとする風潮とは別に、ナチ的人種観の発端になったのはフランス人ゴビノー伯の著作『人種の不平等について』(1855年)である。彼は、フランス人でありながら自らの社会的地位に対する不満から、自己の先祖が北方アリア系であることを主張するとともに、「アリア人種」を、中でもその最も純粋な形態であるゲルマン人を最も高貴な人種であると説いた。さらに彼はその反対類型の人種の典型としてセム人種を取り上げ、肉体的にも、精神的にも劣等な人種であると結論づける。そして、「アリア人種」は将来絶対的支配権を握るよう運命づけられていると主張する。しかし、グラウサーの指摘によれば、この「アリア人種」という表現は、言語学上の概念を作為的に生物学的事実へ移植したものであるという。サンスクリット語の一部と、ギリシャ語、ラテン語、ペルシャ語、ゲルマン語には共通性があり、その祖語を「アリア語」と呼んだのは言語学者のF. ボップ(1791~1867)であるが、彼が使用する「アリア人」とはあくまでもアリア系の言語を話す人々のこと意味するにすぎなかったのである。その意味でゴビノー説の学問的根拠は極めて希薄であった。

ところが、当時のヨーロッパにおいて政治的・経済的に無力であるとともに、混乱していた領邦国家ドイツにおいては、このゴビノー説が、主に保守主義者たちの間に喝采を持って受け入れられる。彼らの代表として掲げられるのは、歴史家H. v. トライチケや、文化批評家P. d. ラガルドであった。彼らは、H. ハイネらの進歩的なユダヤ人市民階級と敵対していたためにゴビノー説を歓迎した。さらにこうしたゲルマン至上主義的雰囲気は、W. R. ヴァーグナー、哲学者のH. S. チェンバレン(ヴァーグナーの婿)などへと受け継がれていく。特にチェンバレンの著作『十九世紀の基礎』(1899年)では、人種神話を正当化するために人類史が新たに解釈し直され、修正が施される⁽²²⁾。彼は歴史的に見た北方人と「アリア人種」の文化創造力の優秀性を強調するとともに、ユダヤ的要素が混入したキリスト教のゲルマン化を行った。彼において、イエス・キリストは、アリアのガラリアに生まれた碧眼金髪の人間に仕立てあげられた。

初期ナチ運動において、基本的なナチズム思想の書とされたローゼンベルクの著作『二十世紀の神話』は、このチェンバレンの思想を下敷きにしたものであった。その学問的真偽はともかく、彼はチェンバレン同様、古代史の史料を駆使して世界史上におけるゲルマン人の功績を強調する。バビロニア、エジプトさらには中国を発祥とする世界のあらゆる文明の発祥と繁栄の源は、太古のアトランティスに居住した北方的「アリア人種」に負うていると言う⁽²³⁾。さらにローゼンベルクは、この著作の中で人種生物学的に解釈されたルソー主義に立脚することによって「アリア人種」の血の純潔性の維持を訴える。すなわち、太古の時代から生まれながらに善なる人間である碧眼金髪の「アリア人種」が、ユダヤの蛇の誘惑によって—すなわち混血によって—汚されていることを訴えるのである。このように、ローゼンベルクにおいては、歴史学、生物学に限らずあらゆる学問は、過去における「アリア人種」の優秀性の確認と、将来における「アリア人種」の純粋な再生を実現させるための手段として使われたのである。

ところで、ローゼンベルクが、ナチ党対外策局指導者という地位にありながら、党内では政治的に無視されていたことはナチズム研究においてすでに定説となっている⁽²⁴⁾。しか

しその事実、社会現象としてのナチズムに対する彼の役割を低めるものではない。ブラッハーの指摘にもあるように、彼の著作『二十世紀の神話』が150万部も普及し、ナチズム思想のバイブルともいえるべきものとなった社会的影響力は無視できない。その意味で彼は初期ナチズム運動におけるイデオログの一人として重要であろう。もちろん、『二十世紀の神話』の中で展開されているナチズムの世界の建設が、実現不可能な虚像であったことは改めて述べる必要もないであろうが、ここで重要なのはその著作が少なくとも虚像であるナチズムの世界のイメージを増幅させ得るにたる書であったことである。

〈ナチ的「人種理論」との論争〉

リットは、非学問的とも言ってよいこの著作と、その中で展開されている論理的矛盾を、一蹴したり、単純に批判したり、攻撃したりするのではなく、極めて冷静な歴史哲学的視点に立って暴いていく。

彼はまず、ローゼンベルクの諸論の主要な前提となっている次のようなテーゼを問題にする。「人種、魂及び自然は、永久の前提であり、永久の現存在、永久の生命であって、そこから初めて文明、信仰形式、芸術等がかくある存在として生じてくるのである」⁽²⁵⁾。リットによれば、このようなローゼンベルクのテーゼにおいては、一民族が何を創造し、活動したいかが、最初からその民族の人種的性質において先天的に決められてしまっているという。個々の民族には、「歴史的慣習に組み込まれるより以前に定められた原素質(Uranlage)」があり、その素質は「単なる理念ではなく、目標として初めから努力がなされるものでもなく、人種の〈現存在〉とともに、すでに完成され、影響力を持っている」ものとして想定されている⁽²⁶⁾。

民族に超歴史的な原素質があることを強調せねばならない理由は、もちろんゲルマン民族の人種の優秀性を絶対化するために他ならないが、そこには論理的自己矛盾が存するという。ローゼンベルクは、チェンバレンに従い史料を駆使してゲルマン民族の優秀性を多様な角度から歴史的に後づけている。しかしそのことは、原素質は超歴史的なものであると定義そのものと相矛盾するものである。というのは、民族の文化創造や活動を規定するのが原素質であるというのなら、文化創造や活動の生成・発展のプロセスは、歴史的な後付をする必要のない予め定められたものとして生起するものとなろう。すなわち、そのようなプロセスは、歴史的根拠づけや説明なしにそのものとして存在するものに他ならない。にもかかわらず、ローゼンベルクは、原素質の超歴史性を前提としたままで、そのプロセスの説明を歴史的に詳細に根拠づけていくという論理的矛盾をおこしてしまっているのである。

ところで、ローゼンベルクの民族観、すなわち、「アーリア人種」に、とりわけそこに含まれるゲルマン民族に先天的な優秀性が確認できるというこの民族観の根本にあるのは、「民族生物学的」視点である⁽²⁷⁾。ゲルマン民族の原素質は、ローゼンベルクはそれを「永久的なゲルマン衝動」と見なしている一自己生成するものであるが、同時にそれは、常にその素質を内面的に活性化させておかなければ「退化 Entartung」するものでもあるという⁽²⁸⁾。このことは、動物の野生的衝動が家畜化されることによって「退化」することと同義と解釈してもよいであろう。ローゼンベルクによれば、このような「退化」は、民族の内面的生活を、ゲルマン的精神の心的・人種的な生活様式へ、あるいは「かの北方的伝統様

式」へと回帰させることによってくい止めることができるという。特に、ゲルマン民族の若き世代にも「人種的遺伝質 rassisches Erbgut」として受け継がれているこの衝動の退化をくい止め、さらに高揚させることが焦眉の急務であるという。

リットは、このような「民族生物学的」視点を、純粋な学問的視点とはおよそかけ離れた「疑似歴史学的＝生物学的」視点であると批判する。純粋に生物学的に見れば、およそ人種とは、「個々の人間にとっての体格、頭蓋、目鼻だち、皮膚の色などによる先天的規定、すなわち個々人の成長を通して身体的には伸長はするが、しかし新たに生み出されたり、改められたりすることはない先天的規定を意味する」⁽²⁹⁾ にすぎないので、それ以上でもそれ以下でもない。しかも、生物学的に見れば一つの「種」の次世代に受け継がれる人種的遺伝質は、そのような先天的規定以外にはありえないはずである。リットは、モンゴル人を例にとって次のように説明する。「モンゴル人は、自らの身体的な性質に従って、運命が彼をどこへ連れて行こうと、さらに運命が彼への諸々の影響や出会いによって彼に何を引き起こそうとも、モンゴル人なのであり」⁽³⁰⁾、それ以外の何物でもない。しかし、一人のモンゴル人が、諸々の運命の下で引き受ける「心的存在 das seelische Sein」は、そこで成長する環境の特質に応じて、その環境を超越してやってくる宿命の内容に応じて、さらに彼が遂行するべき行動に応じて多種多様である。人種の「身体的存在は、生まれる、すなわち先天的計画に従って生み出されるのである……」⁽³¹⁾ が、これに対して心的存在は、運命を、自由を、責任を持ち、それ自体で生成し、無限に変化するとともに、変化させることができるのである。このことは、次のことを意味するとリットはいう。「心的存在は、歴史を持つ」と。彼にとって歴史は、生ける者がそこで単に生成し、先天的なものによって成長させられるものではなく、生ける者がそこで思索し、活動し、決心と行動を通して「自らを形成する世界」であった。このように考えてくるとゲルマン的精神の心的・人種的な生活様式や北方的伝統様式を起源とする「永久的・ゲルマン衝動」も、過去の特定の運命の下で「アーリア人種」が形成した心的存在の一形式にすぎないことになる。そのようなものを普遍化、絶対化することの非現実性をリットは批判するのである。

4. おわりに

1937年リットは、学長の要職まで務めたライプティヒ大学を自発的に退く。そして、以後終戦までの期間、世俗的な関わりを一切たち、一私人として哲学研究に打ち込む毎日をおくることになる⁽³²⁾。しかし、彼が退職までの期間大学人として、しかも公的な立場からナチズム批判を行ったことは、すでに見てきた当時の大学を取り巻く諸状況を考えれば極めて「勇気ある」行為であったと言えるであろう。リットは、ローゼンベルク流の似非学問的イデオロギーが蔓延する中で、純粋に学問的論究態度を持ってその論理と対決したのである。

ただ、そのようなリットのナチズム批判においてもその学問的限界性があったことを、リングエルバッハが指摘している⁽³³⁾。確かに彼は、一方でナチズム思想あるいはナチズム的世界観の学問的問題点を明らかにすることに一定の成果を示すことができた。しかし、他方でそのような思想や世界観の土台となる政治的支配体系の構造、あるいは目標設定に関してはほとんど論究がなされていないのである。このことは、精神科学的教育学の学問的性

格の限界性でもある。すなわちそれは、文化哲学的視点への偏重がもたらす社会学的視点、とりわけ社会構造分析に対する欠如である。リットのナチズム批判においてもそのことは当てはまるという。ただ、リットの論究スタイルにおける社会学的視点の欠如についてはともかくも、彼が歴史哲学的視点からどこまで個人と社会の問題を論究しえたか、あるいは論究する可能性が彼の論理の中に包摂されていたか、については彼の初期思想との関係において今一度検討される必要があるように思われる⁽³⁴⁾。

ところで、本論においては、リットとナチズムとの関係について、主にナチ体制下におけるリットの思想行動を概観することに主要な力点が置かれた。そのため、ナチズムと対決した彼の歴史観及び人種観の考察もその主要な論理を確認する程度に終わってしまったことをお断りしなければならない。そのため、彼のナチズム批判の重要な鍵概念である「歴史的出会い geschichtliche Begegnung」と、その概念に基づいたドイツ精神(＝ゲルマン精神)とキリスト教との関係については十分な論究を行っていない。このことについては今後の検討課題にしたいと思う。

註

- (1) W. クラフキ/小笠原道雄編『教育・人間性・民主主義』玉川大学出版部、1992年、157～160頁。著名な教育学術誌 *Zeitschrift für Pädagogik* は、1988年別巻にて「教育学と国家社会主義」というテーマで特集を組んでいるし、1990年のドイツ教育学会(於：ビーレフェルト)においてもこのテーマが取り上げられたという。
- (2) リットとナチズムとの関係を取り上げた主な先行研究として次の論文がある。
- K. C. Lingelbach, Theodor Litts Kritik der nationalsozialistischen "Weltanschauung". Ders. in: *Erziehung und Erziehungstheorien im nationalsozialistischen Deutschland, 1987, S. 221-245.*
- W. Klafki, Litts Auseinandersetzung mit dem Nationalsozialismus. Ders. in: *Die Pädagogik Theoder Litts, 1982, S. 271-282.*
- F. Nicolin, Theodor Litt und der Nationalsozialismus. in: *Pädagogische Rundschau, Heft 2, 36. Jahrgang, 1982, S. 95-122.*
- 新井保幸論「リットのナチズム批判」(『教育哲学研究』第46号、1982、所収)
- (3) 山本 尤『ナチズムと大学』中央公論社、1985年、26～35頁。
- (4) K. D. ブラッハー/山口、高橋共訳『ドイツの独裁 I』岩波書店、1975年、487～489頁。
- (5) シュプランガーは、ナチ学生連盟によるユダヤ人教師追放キャンペーンの禁止をプロセン文部省に求めたが、聞き入れられず、辞職を強いられる。このようにシュプランガーは、当初反ナチ的行動を取ったが、その後復職し終戦までナチズムに対して極めて曖昧な両義的な態度をとる。彼の思想の両義性に関しては以下の論文が詳しい。田代尚弘論「シュプランガーにおけるファシズムの問題」(『教育学研究』第50巻、第4号、1983年所収)。
- (6) 小笠原道雄『現代ドイツ教育学説史研究序説』福村出版、1974年、292頁。
- (7) W. Flitner, Die Erziehungslage nach dem 5. März 1933. in: *Die Erziehung, Jg. 8, 1933, S. 410ff.*
- E. Spranger, März 1933. in: *Die Erziehung, Jg. 8, 1933, S. 401ff.*
- (8) A. ラングは、両者の論文の構造を詳細に分析し、ナチズムに対する彼らの見解の曖昧さを指摘している。特に S. 49 以下を参照せよ。
- A. Rang, Reaktionen auf den Nationalsozialismus in der Zeitschrift 'Die Erziehung' im

- Fruehjahr 1933. in: *H-U. Otto/H. Sünker (Hrsg.), Soziale Arbeit und Fachismus, 1986, S. 35-54.*
- (9) T. Litt, Die Stellung der Geisteswissenschaften im nationalsozialistischen Staat. in: *Die Erziehung, Jg. 9, 1933/34, S. 12-32.*
- (10) Ibid., S. 12.
- (11) "Völkischer Beobachter", 14. November, 1934, S. 1.
- (12) T. Litt, Philosophie und Zeitgeist, 1935, S. 55.
- (13) Ibid., S. 10.
- (14) Georg Wilhelm Friedrich Hegel Werke 7, Suhrkamp, 1970, S. 26ff. (邦訳:『世界の名著35ヘーゲル』中央公論社, 1967年)。
- (15) 上妻清他共著『ヘーゲル法の哲学』有斐閣, 1980年, 45~46頁。
- (16) Litt, 1935, a. a. O., S. 14.
- (17) Ibid., S. 15-16.
- (18) Nicolin, 1982, a. a. O., S. 109.
- (19) "Völkischer Beobachter", 14. November, 1934, S. 5. 「民族の監視者」との意味を持つナチ党の中央機関紙。発行部数は、最大時120万部を越えていた。学校のドイツ語テキストとして使われることも多かったと言われ、その意味では標準的な大衆紙であった。同紙の編集長は、A. ローゼンベルクであった。
- (20) 本論文では、原典として以下の版を利用した。A. Rosenberg, *Der Mythos des 20. Jahrhunderts*, 103-104. Auflage, 1936. 尚、邦訳書としては吹田順助/上村清延共訳『二十世紀の神話』(中央公論社, 1938年)を利用した。また、邦訳書からの引用については、原典を参照し修正した箇所がある。
- (21) H. Glaser, *Das Dritte Reich, Wie es war und wie es dazu kam. Bericht und Dokumente*, 5., überarbeitete und ergänzte Neuauflage, 1979., S. 28-30. (邦訳:関楠生訳『ヒトラーとナチス』社会思想社, 1963年 本書は初本版の邦訳である)。
- (22) J. F. ノイローレ著/山崎, 村田共訳『第三帝国の神話』未来社, 1963年, 166頁以下。
- (23) Rosenberg, 1936, a. a. O., S. 25.
- (24) 山口 正『ナチ・エリート』中央公論社, 1976年, 83, 94頁。ブラッハー 前掲書, 507頁。『二十世紀の神話』の中で展開されている彼の宗教改革に関する主張は、ヒトラーと対立するものであった。というのも、カトリック、プロテスタントの両陣営と対抗する第三の「ドイツ的宗教」の樹立を目指すというローゼンベルクの主張は、両陣営を取り込むヒトラーの宗教戦略とは相入れないものであったからである。(野田宣雄『教養市民層からナチズムへ—比較宗教社会史のこころみ—』1988年, 120~121頁)。
- (25) Rosenberg, 1936, a. a. O., S. 251.
- (26) Litt, *Der deutsche Geist und das Christentum*, 1938, S. 11.
- (27) Ibid., S. 11ff.
- (28) Rosenberg, 1936, a. a. O., S. 143.
- (29~31) Litt, 1933/34, a. a. O., S. 24.
- (32) H-G. ガダマーの自伝的な著作『哲学修業時代』(1977年)の中で、この時期から戦後にかけてのライプティヒ大学の状況が述べられている。リットは戦後マルクス主義に席卷されていく大学教育の矛盾を厳しく批判し、今度はソビエト当局より解任させられる。そのため彼は、ボン大学へ移り同大学の教育科学研究所創設に関わることになる。(H-G. ガダマー著/中村志朗訳『哲学修業時代』未来社, 1982年, 140~174頁)。
- (33) Lingelbach, a. a. O., 1987, S. 242-245.

- (34) 精神科学が取り扱う歴史現象と人間存在との関係や、個人と社会の問題は、すでに彼の初期思想の集大成である『個人と社会』(1926年)において詳細に論究されている。リットは、ナチズムとの対決の中で上述の問題に再度取り組んだ、いやむしろ取り組まざるを得なかったと言えよう (Litt, 1933/34, a. a. O., S. 19 を参照せよ)。

付 記

本論文は、平成5年度九州産業大学国外特別研修(ドイツ・ボン大学哲学部教育科学研究所)における研究成果の一部である。

Nationalsozialismus und Geisteswissenschaft

—T. Litts Auseinandersetzung mit Nationalsozialismus—

Tetsuya OGAWA

Faculty of International studies of Culture

Department: Regional studies of Culture

T. Litt (1880–1962) war die älteren Vertreter der Geisteswissenschaftlichen Pädagogik. Er hat 1937 nach Zusammenstößen mit nationalsozialistischen Börden demonstrativ seine Emeritierung beantragt und erhalten. Nach 1945 hat er wieder seine Arbeit fortgesetzt. Dieser Aufsatz versucht, Litts Auseinandersetzung mit Nationalsozialismus beleuchten.

Der Inhalt des Aufsatzes werden wie folgt entwickelt.

Ungefähr seit zehn Jahren gibt es innerhalb der Erziehungswissenschaft der Bundesrepublik eine immer lebhafter werdende Diskussion über das Verhältnis der Geisteswissenschaftlichen Pädagogik zum Nationalsozialismus. In national sozialistische Zeit war seine pädagogische Einstellung zu keinem Zeitpunkt in Gefahr, ins Nationalsozialistische umzuschlagen. Nach 1933 hat er den Mut gehabt, in Publikationen die Rassentheorie und die Geschichtsauffassung des Nationalsozialismus offen zu kritisieren. Besonders hat er Werk "Der Mythos des 20. Jahrhunderts" von Alfred Rosenberg ausdrücklich als Repräsentant der rassentheoretischen Geschichtsauffassung kritisiert.